

# 読者投稿

# 宮本武蔵と私

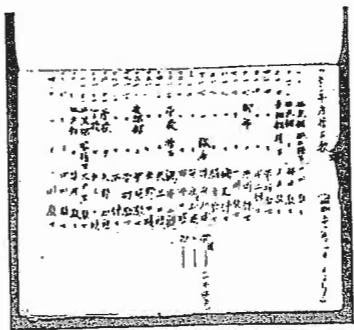
## 武蔵先生を生涯の師と仰いだ父一川格治

### 一川英機

(東京都・63歳・第一生命剣道師範)

仕事は己がする、評価は人がする

私には、剣道を始めてから稽古をお願いした方の名前を記しているノートがある。「稽古数ノート」と称しているが、現在で五冊目になった。これまで一万六千六百二十三名である。しかし父格治(二天一流村上派十七代師範)は生涯十七万人強を超えていたから、まだその十分の一も達していない。改めて父のすごさを感じるとともに、剣の道のはかり知れない魅力と奥深さも痛感する。私と宮本武蔵の出会い、「武蔵先生」と呼んで生涯の師と仰いでいた父を通してである。



第一冊目の「稽古数ノート」

武蔵先生の「朝鍛夕練」の教えにしたがって、その一回一回の稽古に全身全霊をぶつけていくのが父の信念。武力をつけることが人間形成となる。それには大会で勝つためとか昇段審査に合格するためとかではなく、テールに薄紙を一枚一枚重ねていけば次第に木目が見えなくなるように、正しい心で朝鍛夕練しなければならぬ、というのが口癖であった。

父は子ども四人には剣道をとくに勧めなかつたけれど、自然と男の子三人は剣道、長女(治子)は薙刀をやるようになった。それぞれが始めたとき、その「朝鍛夕練」の意味を込めて父が「稽古数ノート」を子どもにも贈った。ノートの冒頭にこう書かれている。

と云われたり、五段以上とそれ以下に分けてグラフを作ってくれたりもして満足気な表情を浮かべることもあった。

私は長男だから、父の跡を継いで剣道家になるものと漠然と思っていた。しかし「お前は世間で剣道を遣え。世間で迷い、苦しむことがあるだろうから、その時は剣道に帰って来い」と言われた。また、人間は苦しみや悩みに会うために生まれてきたものだから、そのためのために剣道をやっている。苦しいときは苦しさを真正面から向かえば、必ず道は開けてくる、ということも言っていた。それを痛感したのが旭化成に就職して五年目ときだった。

大阪勤務のときで、新規事業に携わった。上司は怖くてうろたえ型で、会議の度にあれこれと注文をつけたり質問をしてくる。満足した答えでないと、どんどんつっこまれる。あるとき、精神的に追い詰められてその人に会いたくなくてどこかへ行ってしまおうと思つた。しかし、一旦問合を切って考えると、生逃げとおせるわけでもなく、このままでは

自分が駄目になる。そのときに父の言葉が浮かんだ。「よし、逃げずに正面からぶつかっていきこう、積極的に打たれることを心掛けよう」と肚を決めた。そうして会議に臨むと、自分では分らないが、自信のようなものが顔に出るのか、上司はとくに質問や注文をしなくなくなり、仕事を任せられるようになった。仕事も剣道も同じなのだと思う。

また、次男宏(法政大学職員)には「試合に出るな」、三男一(鎮西高校教諭)には「剣道専門家になれ」という教えを遺している。各々の性格や剣風を見て、宏は試合に出して勝負にこだわるようになっては剣道がくずれてしまふ、と。逆に一を積極的に試合に出させたりするなど、いろんな経験をさせて専門家になるための教育をしていたの思い出す。兄弟三人、いままその教えを忠実に守っている。



父格治の古希の祝いで写す(昭和56年11月26日) 後列左が三男一、右が次男宏 前列左から母千代子、父、私、長女治子

取りに行くから道を間違える」と。修行は二等辺三角形ではなく、正三角形でなければならぬ。底辺(基礎)を稽古でしっかりしたものをつくりながら、心法と技法が偏らずに頂点(人間形成)を目指さなければならぬとも言っていた。どちらかに偏ると、二等辺三角形になってしまうから、稽古量が底辺の幅にもなるとも言っていた。

稽古といえは、高校時代は朝、学校へ行く前、千本素振りやらされた。この千本素振りでおもしろいのが、遣うと思われる技を全部入れていたことである。例えば正面、左右面、突き、小手、上段からの面、右上段からの面、同じく小手、突き、裏からの突きなどである。時間になってもまだ寝ていると、宏などはよく足の裏を棒でちよんちよんと突つかれて「はよ、せんかい、せんかい」と素振りの千回にひっかけて促されていた。父にはそういう茶目つきもあった。

われわれは剣道をつなぐ時代のリレーランナーである。父は「俺は剣道をするために警察に入った」と公言していた。専門家になりたくて東京高師とか武専にも行きたかったようだが、家が貧しくて断念。そんな時、恩師沢友彦先生から「お金を貰って剣道ができるころがあるぞ」と言われて警察に入った。そして警視と

なり、署長にという話があったけれど、剣道が思うようにできなくなるといふ理由でスパッと警察を辞めたそうである。「背広を脱いでみる、肩書を外してみろ、お前はなにものぞ。一川格治、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。俺は警視、署長、部長という肩書きそんなものは浮世のものであり、中身の無いもの。人間性で勝負する。そのために剣道をやっておる」と名利に執着していなかった。

出張などで美家の近くに来た時は、必ず父に稽古を一本お願いした。終わって家に帰ると、あれやこれやと剣道談義に花が咲いて時問の過ぎるのを忘れてしまうことも度々であった。その度に、おふくろに「いま何時で思つとると。いい加減にしてはよ寝なせ」とたしなめられ、二人で顔を見合わせたものがある。

我々は剣道をつなぐ時代のリレーランナーという言葉が印象に残っている。先人から受け継いだ剣道というバトンを、正しく忠実に次の世代に渡さなければいけない。その渡すあいだ、自分は自分の立場を一所懸命走るだけ、そして上手に後輩に渡すことである。上手には先人の教えを正しく忠実にというこゝとであり、長年やっているとこつちのほうがりやすいと思うことがあるが「我流になつてはいけない。絶対にそれをやるな」と強く戒められた。父が亡くなった十九年経つが、われわれの気持ちの中では死んでいない、問い



「百録自得」は父が晩年好んで揮毫した。絵は私の高校(九州学院)の先輩、西山泰弘範士(元警視庁剣道主席師範)が描く

という父の言葉をかみ締めながら、剣の修行をしていきたいと思つている。

入ってきて机に置いてあった。

て通年動員され、昭和十九年九月十五日には